

八十年前のメッセージ

四街道中学校

三年 武川 意生

今回の広島派遣事業は、今まで感じたことのない驚きに満ちた旅でした。

私は平和記念資料館で学んだことを人に伝えるため、たくさん写真や記録を残そうと意気込んで向かいました。しかし、実際目にしたものは今まで教科書や漫画で見てきたものとは全く異なっているものでした。投下された原子爆弾の熱により、歪んでくつついたガラス瓶、火傷で体中が焼けただれた女性の写真、どれほど熱かったのかを考えると、言い知れない不快感と、これまで感じたことのない恐怖に私は写真を撮ることができなくなりました。しかしこれは現実におこったことで、目を背けてはいけなないと痛感しました。

資料館見学のほかに、被爆した方の体験を伺いました。八十九歳の波田保子さんが九歳の時に被爆したお話です。その中でも特に印象に残っているのが、

「被爆して一番つらかったことは、家族と笑顔で暮らせる時間が失われたこと」という言葉でした。私は、火傷が痛いことや住むところがないことなど身体的な痛みを想像していました。しかし被爆による差別や父親の病気などが続くことで家族から笑顔が失われていき、元のようにには戻れなかったことが辛かったとおっしゃっていました。核兵器は形あるものだけでなく、波田さんの残りの人生まで燃やし尽くしてしまったのだと感じ、とても悲しい気持ちになりました。

原爆が落ちてから八十年。私は幸いにも被爆した方からのメッセージを受け取ることができました。焼かれて亡くなった方、生き残って生活を立て直した方、その先に今の私たちの生活があるのです。核兵器による被害を受けたのは私達日本人が初めて最後になるようにしたいです。まずは、私たちの国に起こったことを知ることが、核兵器のない世界に近づく一步になるのではないのでしょうか。

つなげる思い

四街道中学校

三年 稲嶺彩那

広島派遣事業では沢山の戦争遺物を見学し、講話を聴く機会を頂き、「被爆地の広島」を体感してきました。一番印象に残ったのは「被爆体験講話」です。お話をして頂いた波田保子さんは当時、疎開を

していたそうです。疎開先でも防空頭巾で登校した事、食べ物不足、お風呂に入れずシラミやウジが湧く…。そんな環境の中、親に会えない子ども同士の喧嘩も絶えず、心身ともにとっても辛い環境だったそうです。とても衝撃を受けました。今まで「戦争時子どもたちは疎開していた。」と学んだ事はありましたが、どこか私は戦争から離れたら、安心安全に元気で過ごしていたに違いないと、無意識に考えていたのです。しかし現実のお話を聞いて私は知っているつもりになっていただけで、現実とはかけ離れている事を感じました。

講話の後、見学した平和記念資料館で、私は音声ガイドを最後まで聞く事ができませんでした。とても辛すぎたのです。広島へ行き原爆ドームを見て、被爆者が飛び込んだという川沿いを歩き、講話を聴くという体験を通して戦争をよりリアルに感じられるようになったのかもしれませんが。

翌朝八時十五分。私達はホテルの窓からスマートフォンを片手にそれぞれ静かに動画を撮っていました。広島では、毎朝原爆が投下されたこの時間に音楽が流れると教えてもらったからです。帰宅し、家族や友人にその動画を見せました。誰もこの事を知っている人はいませんでした。広島派遣事業に参加したからこそできる、戦争の伝え方の一つだと思いました。原爆の被害に遭われた当時の方の想いと毎朝追悼の意を持って一日を始める今の広島の方の想いを伝えていくこと、これがこれからの私達の使命だと思っています。

「平和をつなぐ人々の祈り」

千代田中学校

三年 田仲 結和

私は、広島派遣事業で、原爆ドームや平和記念公園、平和記念資料館を訪れ、被爆者の方の体験講話を聞くことができました。講話で特に心に残ったのは、疎開していたため両親と離れ、辛い気持ちを受け止めてくれる人がいなかったことが一番辛かったという話です。その話を資料館の展示や写真、遺品と重ねて見たとき、原爆ドームは最初に見た印象とは違う見え方をし、ただの建物ではなく、多くの人の悲しみや孤独の象徴のように感じられました。原爆ドームは被害の象徴であると同時に、二十年間残すかどうか悩み続けた末にやっと保存することが決められたようで、その決断には「もう同じようなことが起きないように」という被爆者の強い思いが込められていると感じ、胸が熱くなりました。さらに、平和記念公園と原爆ドームを一直線上に結ぶ平和の象徴としての「平和の軸」が昨年の二月に伸びたこ

とを知り、これは被爆者の思いが現代にも受け継がれている証だと感じ、歴史の重みを改めて実感しました。

資料館では被爆者の証言や衣服、生活用品などが展示され、教科書では学べなかった生々しい現実や人々の苦しみを肌で感じる事ができました。平和記念公園などに飾られた千羽鶴についても、三年間保管された後、はがきやノートなどに再利用されていることを知り、人々の平和への願いが形を変えて次の世代に受け継がれていることに感銘を受けました。

こうした体験を通して、戦争の悲惨さや平和の尊さを改めて実感するとともに、過去の出来事を後世に伝える使命を感じました。被爆者の声や資料館の展示を直接体験したことで、平和の意味や命の重みを、より身近に感じられ、普段の授業や教科書では得られない学びを得られた貴重な経験となりました。

平和の大切さを胸に

千代田中学校

二年 根本 心羽

私は十月十一日と十二日に、広島派遣事業に参加しました。実際に広島へ行つて、被爆者の方の話を聞いたり、資料館を見学したりして、心に深く残る体験となりました。今まで教科書や映像でしか知らなかった戦争や原爆の恐ろしさを、自分の目で見て、耳で聞いて、初めて「実際にあったこと」として実感しました。

最初に見学した原爆ドームは、写真で見るとよりもはるかに大きく感じました。壊れたままの姿の建物を、胸が締めつけられました。八十年前にこの場所で多くの命が失われたことを知り、言葉が出ませんでした。それでも、あのドームは「二度と同じことを繰り返してはいけない」と私たちに語りかけているように感じました。

被爆体験講話では、被爆者の「一番辛かったことは抱きとめてくれる人がいなかったことです。」という言葉

葉が心に残りました。その瞬間、私は心が苦しくなりました。いつも友達や家族と笑い合って過ごしている日々は当たり前ではないのだと気づきました。今こうして大切な人と笑い合えることに感謝しなければいけないと強く思いました。

平和記念公園では、「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返しませぬから」という石碑に刻まれていた言葉が心に残りました。その言葉を見て、平和を守ることへの自分たちの責任を強く感じました。

今回体験したこと一つ一つから平和の大切さを強く感じました。今の幸せな生活は、過去の悲しみの上にあるのだと思います。私はこれから、人を思いやる心を大切にして、戦争のない平和な世の中の尊さを多くの人に伝えていきたいと思っています。

続く願い

旭中学校

三年 細井 優衣

今回、私たちは広島を訪れ、原爆や戦争について学びました。

私が特に印象に残っているのは被爆体験講話です。お話をしてくださった方は、小学三年生の時に原爆を体験されたそうです。修学旅行どころか、普通の生活さえ送れなかったと語っていらっしゃいました。広島に向かう新幹線の中で「もう一度修学旅行に行きたいね。」と話していたのに、その言葉を聞いたとき、当時は行きたいと願うことすら難しかったのだと知り、強い衝撃を受けました。今のように美しい夜景や活気ある街並みが見られなかったことを思うと、胸が痛みました。

他にも、説明してくださる方々は皆、「二度と同じことを繰り返してはいけない」という強い思いをもって話してくださいました。被爆者の方々が、辛い経験をしながらも平和への願いを語り続けておられる

姿には、心を打たれました。教科書で学んできたことを、実際の資料や体験談を通して知ること、戦争や原爆の悲惨さをより現実的に感じました。

また、被爆者の方が周囲から、近づくと感染するといった根拠のない差別を受けていたことも知り、無知であることの怖さを実感しました。正しい知識や考えをもつことが、どれほど大切かを改めて感じました。もし当時の人々がもっと多くを知り、理解し合っていたならば、戦争を終わらせる方法も違っていたかもしれません。だからこそ、今回学んだことを忘れずに、次の世代へと語り継いでいくことが大切だ、それを私がしなければいけない、と強く思いました。

現在の広島美しい街は、多くの人々の努力と祈りの上に築かれたものです。今回の経験をを通して、平和の大切さを自分の言葉で語れるような大人になりたいと思いました。そして、今まで続いてきた平和への願いがどれだけ経っても続いていくことを願います。

平和をつなぐ

旭中学校

三年 川崎 琴音

一九四五年八月六日、広島に原子爆弾が投下され、一瞬にして多くの命が奪われました。焼け野原となった広島は、長い年月をかけ、美しく穏やかな街へ生まれ変わり、今もなお平和の尊さを静かに語り続けています。私は今回初めて広島へ行き、過去の悲しみと未来への希望が同時に息づいていることを肌で感じました。

平和記念公園では原爆ドームを見つめ立ち止まる人や、慰霊碑の前で静かに手を合わせる人々の姿がありました。その光景から、あの日の出来事が決して過去のものではなく今も誰かの心の中で続いているのだと気づきました。数ある記念物の中でも、私の心に最も強く残ったのは「平和の灯」です。戦後八十年間一度も絶えることなく燃え続けるその炎には、「二度と戦争の悲劇を繰り返さない」という誓いと、

「核兵器のない世界にしたい」という人々の願いが込められています。

園内を案内してくださったガイドさんが語った「核兵器が世界からなくなって、ようやく本当の平和になる」という言葉は、私の胸に深く響きました。その言葉を聞き、私たちが平和な今を生きられるのは、多くの人々の悲しみや祈りの上に成り立っていることを強く感じました。そして、亡くなられた方や被爆された方々の思いを受け止め、次の世代へ語り継ぐことこそが、私たちにできる大切な使命だと思いました。

この派遣を通して、平和は誰かが守ってくれるものではなく、一人一人がつくり出すものだと感じました。広島で学んだことや感じた想いを胸に、身近なところから優しさを広げ、言葉と行動で平和を伝えていける人になりたいです。

世界平和への第一歩

四街道西中学校

三年 小柳 凜紗

今から八十年前の一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に一つの原子爆弾が落とされました。この原爆によって広島街は焼け野原となり、約十万人もの罪のない人々が命を落としました。今回の広島派遣事業の二日間で、私たちが学んだことは教科書では知ることのできないものばかりでした。その中で、特に印象に残った出来事が二つあります。一つ目は、平和記念公園にある「平和の灯」です。この平和の灯には、核兵器廃絶と世界恒久平和への強い願いが込められています。また、この灯は一九四六年に点火されて以来ずっと燃え続けており、「核兵器が地球上から姿を消すまで燃え続ける」という当時の人々の強い意志を感じることができました。

二つ目は、広島平和記念資料館にある「原爆の絵」です。これは、被爆者が自らの経験を後世に伝えるために描いたものです。原爆によって逃げまどう人々、

苦しみながら今まさに息絶えようとする人、これまでの生活が突然一変し、家族や愛する人たちとの別れ、そして原爆による風評被害、病気との闘いなど、次から次へと作者の思いが伝わってきました。

今回の広島派遣事業を通して、戦争や原爆は当たり前前の生活を壊す、残酷でとても悲惨なものであると改めて感じました。今年には戦後八十年。原爆を経験した人が減り、後世に伝える機会も少なくなっています。さらに、世界では今も戦争が続いている場所があります。だからこそ、今を生きる私たちが平和について深く考え、それを世界に伝えていかなければなりません。みなさんも「平和とは何か」を考えてみてください。その行動が、世界平和への第一歩につながると私は思います。

原爆の記憶を繋ぐために

四街道西中学校

二年 石井 睦実

「戦いは失われるものしかない。だから、話し合いが大事なのです。」

この言葉は、被爆者の方が後世に繋いでほしいと私たちに強く訴えられた言葉です。

広島は人類史上初めて原爆が落とされた地です。原爆が落とされたことにより、約十四万人の人々の命が失われました。この人数は四街道市の人口、九万六千人を遥かに上回ります。今もなお後遺症で苦しんでいる人も大勢います。私たちは後遺症で亡くなったお父様を看病していた方にお話を伺いました。

波田保子さんという、小学三年生の時に被爆した方でした。波田さんは当時、疎開先のお寺で何人もの子供たちと共同生活をしていました。お寺は檻のように、親とも会えず、喧嘩をしたり我儘を言ったりと、みんながギスギスしていたそうです。また、

まともにお風呂に入れずシラミがわき、夜も眠れなかったそうです。このように教科書では「学童疎開」という一言で表される言葉でも、背景には子供にとつては大変な過去がありました。

一九四五年八月六日八時十五分、広島に原爆が投下されました。見たことのない異様なキノコ雲、立つことのできないほどの揺れ、耳をつんざくような轟音が波田さんを襲いました。その後、波田さんは被爆したご両親に約一か月ぶりに再会しました。波田さんは「大切な人とのあたたかい時間、平和だったころの街を失ったけれども、私は仕事や原爆症を患った父の看病を貧しいながら頑張りました。」と語っていました。波田さんは生きることを決して諦めなかったのです。

冒頭の言葉は、未来を創る者として継承していかなければならないと深く心に刻まれました。今、大切な人と暮らせる幸せ、平和のためにできることを改めて考えさせられる機会となりました。

ヒロシマを見る

四街道北中学校

三年 北島 紗也

栄えた広島街並みからぽつんと現れた原爆ドーム。まるでその場所だけ時が止まっているようだと思いました。原爆の傷跡があるにもかかわらず広島県民の生活に溶け込んでいて、不思議な感覚でした。実際に被爆者の方にもお話を聞き、食事もお風呂に入ることも満足にできず、いつも人とギスギスしていたことを知りました。今では考えられないほど苦しくむなしなものだと思います。なかでも「自分を大切にしてくれる家族がないことが一番辛い。」という言葉が印象的でした。私は悲しい時いつも母が支えてくれます。だからその言葉を聞き、胸が締め付けられ、同時に家族といられる大切さを感じました。平和記念公園では特に原爆供養塔が心に残っています。この場所には引き取り手のない遺骨が七万柱収められているそうです。まだこの人たちにとって戦争は終わっていないと感じました。平和記念資料館

には原爆の傷跡が詰まっていました。展示されているものを見て強い衝撃を受け、思わず目をそらしてしまふ時もありました。本川小学校や袋町小学校、市役所旧庁舎でも被爆者の生きた証が確かにありました。伝言板には家族を探す言葉がぎっしりと書かれており、多くの人が行き来しそこで家族を探していたと思うと、なんだか心がきゅっとなりました。もし私だったらと考えたとき、被爆者の方のように思いやりを持ち動くことはできないと思います。

広島でいろいろなことを知り、学んだあとで見た原爆ドームは最初に見た時より悲しく感じました。物事は学んだ後だとまた違った印象を受けます。平和についても同じで、実際に見たり、聞いたりしないと分からないことがたくさんあります。この先ヒロシマの出来事が色あせないよう伝えていくのは私たちの役割だと思いました。

広島が教えてくれた、大好きな家族

四街道北中学校

三年 飯島 綾菜

私は今回の広島平和学習で「家族の大切さ」を強く感じました。最初に原爆ドームを見たとき想像よりも小さく感じ、こんなに街の中にぽつんとあるのだと驚きました。崩れた壁や骨組みを見て、戦争の恐ろしさを感じました。その後、広島平和記念公園の説明や被爆体験講話の話を聞きました。講師の先生は当時小学生だったそうです。先生はリアルな表現で被爆直後の広島の様子や家族のことを話してくださいました。先生の話の中で「抱きしめてくれる人がいなかったことが辛かった」という言葉で胸が苦しくなりました。あの時代は食べるものも着るものもなく、身体的苦痛が多い中で「家族のことが一番つらかった」という言葉を聞いて、私は家族について深く考えるきっかけになりました。

広島平和記念資料館では被爆した人々の写真や絵、当時の生活を想像させる洋服や持ち物を見て、

息が苦しくなりました。いつもそばにいる家族、いつもの生活が、ある日突然なくなってしまう。その悲しみを想像するだけで涙が込み上げてきました。戦争について一日学んだ後に見た原爆ドームは、大きく恐ろしいものであり、「平和を願う人たちの思い」や「未来へ希望をつなぐ建物」だと感じました。

広島市立袋町小学校では、実際に被爆した校舎を見学しました。階段の壁には多くの伝言や名前が書かれていました。筆跡から家族を探す人々の様子が想像でき、家族と過ごす時間がどれほど大切で、家族の存在が自分の支えになっていることに気づきました。

今回の平和学習を通して、家族と一緒にいられることが奇跡のような幸せだと気づきました。決して当たり前ではない毎日に感謝の気持ちをもち、小さなことでも「ありがとう」を言葉で伝えられるようにしていきたいです。